

(生活・総合的な学習の時間)

子どもが主体的に取り組む生活・総合の学習

～アクティブ・ラーニングのありかた～

大阪市立住之江小学校 島崎貴代 村口飛鳥

1. 研究主題設定の理由

本校では、「豊かな人間性と確かな学力を身につけたたくましい子どもの育成」という学校教育目標のもと、互いのよさやちがいを認め合い、共に支え合う集団の育成に努める教育、基礎基本の確かな定着を図る教育、地域・保護者との連携を積極的に推進し、生きる力を育む教育を進めている。

生活科・総合的な学習の時間では、協働学習が欠かせない。その際、「互いのよさやちがいを認め合い」ができ、「共に支え合う」学習ができる子どもに育ってほしい。

また、主体的な学習態度も、生活科・総合的な学習の時間には大切になってくる。自ら課題を発見し、その解決に向けて協働しながら、グループの仲間と自力解決ができる子どもになってほしい。

このように、「どのように学ぶか」という、学びの質や深まりを重視することが必要であり、課題の発見と解決に向けて主体的・協働的に学ぶ学習（アクティブ・ラーニング）や、そのための指導の方法等を充実させていく必要がある。

2. 研究の概要

研究の主題にせまるため、研究の視点を以下のように設定した（（１）（２）は H 2 7 年度（３）（４）H 2 8 年度）。

（１）課題のもたせ方（子どもの主体性のある課題みつけ）

子どもが「どうして？」「なぜかな？」と興味をもって事象に取り組むのは、与えられた課題ではなく、自ら疑問を感じ、解決したいと思える課題を見つけた時である。しかし、そのためには、指導者側の綿密な準備が必要である。単元の特性をあらかじめ見通し、子どもたちが課題に出会えるように、ひと工夫をしておかなければならない。

（２）情報の整理の指導（思考ツールの有効活用）

効果的な、情報の整理をする 1 つの方法が、思考ツールである。これは、頭の中にある情報を具体的なかたちにして書き込むためのシンプルな図形の枠組みである。自分の頭の中にある情報やなんとなく形成されつつあるイメージを外に出すことを促し、共通理解しやすい視覚化されたものにすることである。考えることの苦手な子どもは、頭の中が混沌としていて、問題をどのように解決していけばよいのか、その手がかりが探せないでいる状態である。その混沌としたものを思考ツールに書き出すことができるようになれば、自分の思考の具体像が視覚的に確認でき、それをフィードバックすることで、思考の方法がわかってくる。思考ツールを活用することで、2 つの効果が期待できる。

（３）子どもが協力し主体的に行う発表（多様な表現の経験）

課題を見つけ、思考ツールを活用して情報の整理をし、まとめた後発信したいことを発表するのが、単元の流れである。

発表の方法は、多くあり、単元や指導者のねらいに応じて、適切な方法を選ぶことができる。また、活動の中で子どもたちが、自分たちの扱いたい発表方法を選ぶことができる。主な発表方法としては、タブレットの活用、コンピュータを使った「プレゼンテーション」、「新聞」、「レポート」、「パンフレット」、「ポスター」、「パネルディスカッション」、「シンポジウム」などが挙げられる。

（４）評価規準・評価基準を基にした評価（子どもと作る有効な評価方法の検証）

年間 1 単元以上特に授業研究単元は、評価規準を基に、子どもたちと評価基準を作りたい。子どもたちと、どんな姿が S か、A か、具体的な姿を共有しルーブリックを作成した後、活動する

ことは子どもにとって、何をどう頑張ったらよいかの指針にもなる。活動の最後に、評価基準を基に自己評価をすることで、自分を見つめる経験になる。指導者は、子どもの自己評価とは別に、評価基準を基に評価をすることも大切である。

(5) カリキュラムの再構築・検証

2か年にわたり、生活科・総合的な学習の時間を研究したので、「子どもが主体的に取り組む生活・総合の学習」を意識した、カリキュラムの再構築できた。

3.研究の成果

(1) 課題のもたせ方（子どもの主体性のある課題みつけ）。

- ・ゲストティーチャーからの臨場感溢れる話や、現地に見学へ行き本物に触れることで、子どもの興味関心を高めることができた。
- ・調べ学習でも、現地でインタビューしたり、質問の手紙を送ったりした結果、区長から直接返事が来るなど、子どもたちの活動への意欲を高めることができた。

(2) 情報の整理の指導（思考ツールの有効活用）

- ・課題をつかむ、情報の整理、調べたものを共有する、まとめる、の各段階においても、いろいろな思考ツールを有効活用させることができた。

(3) 子どもが協力し主体的に行う発表（多様な表現の経験）

- ・身近な題材（お手伝いなど）、相手意識をもった題材（フィリピンの友達と交流など）などを扱ったので、言いたい、聞いてもらいたいという意欲が高く、主体的な発表ができた。
- ・新聞、紙芝居、フリップ、パワーポイント、ペープサートなどを使って多様な発表ができた。

(4) 評価規準・評価基準を基にした評価（子どもと作る有効な評価方法の検証）

- ・「ループリックを子どもと共につくること」や「授業の到達点を子どもの言葉で明確にする」ことで子どもにとって、めあてが自分ごととなり、主体的に学習に取り組む子どもの姿が見られた。

(5) カリキュラムの検証

- ・1年生・2年生は生活科の指導書に準じるカリキュラム。3年生・・・地域、福祉、4年生・・・環境、5年生・・・国際理解教育、6年生・・・自己の生き方、とした。検証の結果、これらのカリキュラムは妥当なものであった。

4.今後の課題

- 思考ツールを使うことを前提として、活動をすすめてしまった。子どもたちが活動の中で、どのような思考スキルを身に付けさせるか、そのために、どんな思考ツールを使わせるのかという授業デザインを作り進めていく必要がある。
- 指導者が与える思考ツールではなく、子どもたちが、自分たちの活動に適した思考ツールを選ぶ力をつけるために、継続した指導が必要である。
- 発表原稿をまとめるとき、情報が多岐にわたったり、情報量が多かったりと、情報過多になりがちであった。子どもにとって何が大切なのかを見極める力を育成する必要がある。
- 自分たちがしたい発表方法を選ぶのではなく、自分たちが調べまとめた内容が、効果的に伝わる発表方法を、選ぶ力の育成が大切である。
- 低学年では、子どもの意見を基に、ループリックを作成することは難しいので、指導者主導で作成し、子どもたちと共有していくほうがよい。中学年では、ループリックのS基準を子どもと作成することが難しい。したがって、子どもの見取りや教材研究を深めるとともに、指導者全員で、A基準からS基準へ発展する際の子どもの姿を共有する必要がある。